大阪・西ノ辻遺跡(2)

1 所在地　大阪府東大阪市西石切町一丁目
2 調査期間　一九八三年（昭58）九月～一九八四年三月
3 発掘機関　㈶東大阪市文化財協会
4 調査担当者　松田順一郎・中西克宏
5 遺跡の種類　集落跡
6 遺跡の年代　縄文時代後期、弥生時代中～後期、古墳時代、平安時代～南北朝時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

西ノ辻遺跡は、生駒山西麓の扇状地上に立地する。従来より、畿内の弥生土器型式の標準遺跡として著名であった。近年国道三〇八号線における道路整備事業と鉄道新設に伴う発掘調査によって、弥生時代のみならず、縄文時代、古墳時代、平安～南北朝時代の遺跡として再確認されるに至った。本調査もその一環であった。調査区内では、柱穴群、井戸、溝などの中世遺構が確認され、おおむね一四世紀後半の所産とされる瓦器椀・土師器を伴うが、木簡が出土したのは、一三世紀後半の瓦器椀を伴う井戸である。その井戸は直径約一・八m、検出面からの深さ約三mのほぼ垂直に落ちる掘形を残すのみで、井戸枠は検出されなかった。井戸内の層序の下半は、使用後遺棄され一定期間放置されていた段階に堆積した黒色砂まじり粘土質シルト、上半は後世（一四世紀以後）の整地によって埋積した暗黄褐色土であった。木簡はこの下半部より出土した。

（大阪東北部）

調査区隣接地でも道路、鉄道建設に伴い調査が実施され、平安～南北朝時代の集落跡のひろがりが、直径約二〇〇mの範囲に予想される。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「〈蘇民将来子孫」　118×33×2　032

（松田順一郎）